

周再賜の信仰と神学（2）

—戦時下の著作の検討から—

大嶋果織

キーワード

周再賜、共愛女学校、共愛独立教会、戦時下のキリスト教、戦時下のキリスト教学校

要旨

戦前・戦中・戦後の足掛け 40 年にわたって共愛女学校校長を勤めた周再賜は、赴任して 16 年目と 17 年目に「友人某氏」の助けを借りて 2 冊の著作を刊行した。1941 年の『基督教要説』と 1942 年の『信仰の真実を求めて』である。前者はキリスト教排撃の風潮が高まる戦時下で、キリスト教が国家にとって有用であることを外部に向けて論証するもので、後者は周の説教 52 編を集めた説教集である。

どちらの著作においても、若い日の周の 7 つの神学的特徴は受け継がれているが、特に『信仰の真実を求めて』では、それぞれの特徴が新たな展開を見せ、深められている。周の女学校校長としての経験が反映されているのだろう。

二つの著作に特徴的なことは、「時局」の影響である。『基督教要説』はかつての自著の改訂増補・改題版だが、ここでは国家にとってのキリスト教の有用性を説くばかりでなく、語句の置き換えなど、時局を意識した注意深い改訂が行われている。また、『信仰の真実を求めて』には、「皇国の国是」翼賛の説教も含まれている。そうした説教は、周が戦時下においても平和を説いたとする当時の生徒たちの証言とは矛盾する。この矛盾をどう解決するか。それは単純な作業ではない。新たな課題が立ち上がってくる。

はじめに

共愛女学校第 9 代校長として 1925 年から 1965 年まで、40 年にわたって共愛学園を牽引した周再賜には、在任中のまとまった著作として『基督教要説』（警醒社、1941 年）、『信仰の真実を求めて』（警醒社、1942 年）、『焦土に嘆く』（共愛文庫、1946 年）、『日訓』（共愛同信教会、1957 年）の 4 冊がある。今回はこの中から、敗戦前の二つの著作『基督教要説』と『信仰の真実を求めて』を取り上げ、「人間に対する徹底的な平等の観念と、人間の持つ可能性への信頼」（拙稿 2017; p.102）をもって共愛女学校にやってきた周が、16 年の校長の経験を経て、その信仰や神学をどのように変化させたのか、また、戦時下の社会状況が周の著作にどのような影響を与えたのかを探ってみたい。

1. 刊行の背景と動機、著作の性格

(1)『基督教要説』の場合

①序文が示すこと

1941年5月に警醒社から刊行された『基督教要説』は、1924年11月に日本組合基督教会本部から刊行された『基督教要義』の改訂増補・改題版である。17年前の自著を改訂発行する意味について、周は序文で次のように述べている。

「基督教は過去70年間、我が国に於て、大なる貢献を為して来たが、現在及び将来に於いては、更に一層適切なる働きを為し得なければならぬ。今や、重大時局に直面し、新体制を実施して居る我が祖国に於て、特に痛切にそれを思う。が、其の為には我が同胞をして、適確簡明に基督教の大要を理解せしめねばならぬ。本書は、然うした要求に応じて編述したものである」。

つまり、日本が「重大時局」に直面し、「新体制」を採っている今こそ、人々にキリスト教を知ってもらわねばならないというのである。周にそのように思わせた「重大時局」「新体制」とはなんだろうか。それは、終わりの見えない日中戦争とヨーロッパでの戦争拡大、そして、その中で発足した第二次近衛内閣とその後の総力戦体制のことだろう。そこでまず、この頃の社会状況を概観してみよう。

②社会状況

本書発行10ヶ月前の1940年7月、発足したばかりの第二次近衛内閣は「基本国策要綱」を閣議決定し、「皇国の国是」は「八紘を一字とする（中略）世界平和の確立」にあり、「大東亜の新秩序」の建設はその始めであるとする「根本方針」を明らかにした。そして、「軍備を充実」して日中戦争を闘い抜き、激動する国際社会の中で皇国の発展を図っていくため、「国家奉仕の観念を第一義とする国民道徳」の確立を始め、道徳・政治・経済・産業など、あらゆる面で国内態勢を刷新していくことを約束した¹。長引く日中戦争打開のため、9月になると日本軍をフランス領インドシナに進駐させ、日独伊三国同盟に調印。10月には近衛を総裁にした大政翼賛会が発足。それまでに解散していた全ての既成政党が合流し、挙国一致で「皇国の国是」の実現に向けて動いていくことになる。（吉田,2007; p.2-4）

この翼賛体制の下で国民生活がどのように管理統制されていったか、そのいくつかを挙げてみよう。まず、9月には、内務省から「部落会町内会隣保班市町村常会整備要綱」が各府県に通達され、部落会・町内会・隣保班（隣組）の全国整備が進められていった（吉田,2007; p.73-74）。これらの組織は戦時下において、政策の伝達、物資の供出や配給、各種住民動員、思想の相互監視など、総力戦体制の末端を担っていくことになる。また、12月には「言論出版集会結社等臨時取締令」が公布施行され、集会や結社は届出制から許可制となり、言論出版への取り締まりが強化された（吉田,2007; p.71）。教育においては翌年3月に国民学校令が公布され、4月に施行。これにより小学校は「皇国の道に則って」「国民の基礎的錬成」を行う国民学校となり、教育を通して「国民道徳の確立」が目指されることになった²。

ちなみにこうした流れの中で、1940年11月に神武天皇即位から数えて2600年を祝う「紀元2600年祝賀行事」が華々しく挙行されことは興味深い（山住,2005; p.127-128）。政府は戦争に向けて、通達や法令だけでは統制しきれない人々の心を、建国神話による祝賀ムードを演出することによって束ねていったのであろう。

③キリスト教をとりまく状況

こうした管理統制は宗教の領域にも及んでいた。宗教ではないとされた国家神道を除く全ての宗教教団が、1939年3月公布、翌年4月施行の宗教団体法の下におかれることになったからである。当初、キリスト者はこの法律をむしろ好意的に受け止めたという（キリスト教史学会,2015; p.29）。キリスト教も一つの宗教として認知されたと考えたのである。しかし、施行2ヵ月後の6月に、文部省から文部大臣による教団設立認可の基準が「教会数50以上、信徒数5千人以上」と内示されると、プロテスタント諸教派の中には戸惑いが広がった。この基準に適合する教団は「30余派のうち7教団」にすぎなかったからである（NCC 教育部歴史編纂委員会,2007; p.67）。そこで、基準に満たない小規模な教派は独自に合併する相手を探すなどして対策を講じ始めた。しかし、8月に文部省の意向が小規模教派の合同による部分的合同ではなく、諸教派を横断する包括的な教派合同であることがわかると、「そこからは雪崩を打つように教派合同へと路線が転換され」たのであった（キリスト教史学会,2015; p.35）。こうして翌年6月に、プロテスタント30余派は合同して、日本基督教団を創立する。ちなみに、周は教会合同に反対で、共愛女学校理事であった半田善四郎宛の書簡で2回にわたり（1940年10月8日、1941年3月12日）、合同推進派への不満を漏らしている（共愛学園百年史編集委員会,2009; pp.363-367、p.378）。

ここで注目したいのは戒能信生の、教会合同をめぐる急激な路線転換の背景には、文部省の意向だけでなく、マスコミによる大々的なキリスト教バッシングがあったという指摘である（キリスト教史学会,2015; pp.31-34）。戒能によれば、1939年9月から10月にかけて、「大阪今日新聞」によって全14回の「救世軍の陰謀を暴く」と題する連続キャンペーンが展開され、翌年3月にはそれに他紙も追随する事態になった。さらに1940年7月になると、複数の新聞が宣教師スパイ事件を連日報道するようになる。これらの記事の見出しを戒能が紹介しているので、その中から前者に属する見出しを二つ、後者の見出しを二つあげておこう。

「在英本部の命のまま祖国に弓引く彼等／大和民族の魂忘れ英人の命に是従ふ」（9月29日）、「新東亜建設の妨害者／英国基督教の飽くなき反日の数々／救世軍は此の英国の尖兵」（10月7日）

「外人教師、牧師の取締り一層強化／文部省防諜に乗り出す」（『大阪毎日新聞』7月31日）、「聖壇に隠れて踊るスパイ 宣教師、観光外人らの怪行動」（『読売新聞』8月3日）

こうしたバッシング報道が展開される中、1940年7月、救世軍幹部4人がスパイ容疑で逮捕拘禁される。数日後に釈放されたものの、救世軍は行政指導の対象となり、イギリス本部との関係を絶ち、日本救世団と名称変更を余儀なくさせられた。戒能はこうした反キ

リスト教的な情勢が、文部省の意向と共に、教会指導者をして教会の大合同に向かわせたと指摘する。(キリスト教史学会,2015; pp.34-35)

④共愛女学校をとりまく状況

キリスト教に対する強い警戒と排撃の風潮は、東京や大阪といった都市部ばかりではなく、群馬にも広がっていたようだ。例えば、『共愛学園百年史』は1939年11月に群馬県議会でなされた次のような質問と答弁の記録を「群馬県会議史」から再録している(共愛学園百年史編纂委員,2009; p.455)。前述の「大阪今日新聞」によるバッシング報道の翌月のことである。

議員質問「知事は公立学校に偏し私立学校の監督指導に遺憾の点はないか。かつて式の時に国歌を歌わずに讃美歌を歌ったという例があった。苟くも日本国民として国歌を歌わず讃美歌を歌うとは何事であるか。時局下これを放任しておくことは監督上黙過できない。試みにその学校の生徒に『神様はどなた様か』ときくと『イエス様です』と答え、『天照皇大神は』と聞くと『天に二神なし』と答えたという事が過去にあった(略)」。

これはもちろん共愛女学校を想定した質問である。その共愛女学校は昭和天皇即位の大典の年であった1928年から、卒業式・入学式の際に「君が代」を歌っていたため、知事の答えは次のようなものであった。

知事答弁「学校教育者の指導方針で某私立学校では教育勅語を奉読しない、君が代を歌わないで讃美歌を歌わせる事実私にも耳にしている。しかし、只今はそうでないと承っている。あれば県も十分監督する。(以下、引用者略)」

過去にあったことを今批判されても、どうすることもできない。この議員質問は、共愛女学校はキリスト教学校であるがゆえに反国体的であると印象付けるための意地悪な質問といえるだろう。ちなみに、1942年に共愛女学校に入学した生徒の1人は、他校へ進学する友人から、(共愛女学校は)「クリスチャンの学校だから爆撃されないのに決まっている」と嫌味を言われたと回想している(共愛学園同窓会,1994; p.72)³。子どもたちの中にも、キリスト教学校に対する否定的な空気が広がっていたと思われる。

⑤刊行の動機と本書の性格

共愛女学校の校長として、また、日本組合教会に属する共愛独立教会の牧師として、周はこうした状況に敏感であった。周は考えた。キリスト教がこれからも日本社会において貢献していくためには、まず、人々のキリスト教に対する警戒心を解かねばならないと。そこで周はかつて「伝道用」に、すなわちキリスト教を知らない人にキリスト教を知らせるために執筆した入門書を現状に合わせて改訂し、刊行することにしたのであった。従って、本書は外部に向けてキリスト教を弁明する性格の書物なのである。

(2)『信仰の真実を求めて』の場合

①情勢の変化

『基督教要説』から10ヶ月後の1942年3月、周のもう一つの著書『信仰の真実を求め

て』が刊行された。

この 10 ヶ月の間に事態はさらに進行していた。共愛女学校では生徒の組織である学友会が解散し、学徒団が結成された。学徒団は「銃後青少年学徒をして挺身奉公の実をあげしむること」を目的として組織されたもので、国の指示の下、県下一世に結団式を举行したという（共愛学園百年史編集委員会,2009; p.387）。また、恒例になっていたバザーが物資不足のため開催できなくなり、生徒製作品展示即売会になった（共愛学園百年史編集委員会,2009; p.44）。このように国民生活はいろいろな側面で窮屈になっていたが、戦争の終わりは見えなかった。そうした中、10 月に東条英機内閣が発足し、ついにアメリカ・イギリスとの戦争が始まる。

12 月 8 日、開戦を知らせるラジオ放送に国民は湧いた。吉田（2007; p.64）は「日中戦争の長期化に倦み、アメリカの対日政策の硬化に苛立ちを感じていた」人々は、開戦を「熱狂的に指示」したという。初期作戦は次々と成功し、大本営による戦勝発表は人々を喜ばせた。特にシンガポール陥落を報告する 2 月 18 日のラジオ放送では東条英機が直接国民に「天皇陛下万歳」を呼びかけ、人々はこれに応じてラジオの前で万歳三唱したのだった（吉田,2007; pp.64-65）。また、3 月 6 日の大本営発表では、海軍の特別攻撃隊作戦が詳しく報じられ、「九軍神」キャンペーンが展開された（吉田,2007; pp.66-67）。

しかし、こうした戦勝祝賀ムードの背後で戦死者も確実に増えていったようだ。共愛女学校では日中戦争開始後から出征兵士の見送りや戦死者の遺骨迎えに生徒達が参列していたが、16 年度は 16 回の「英霊迎え」の記録がある。前年 15 年度の「遺骨迎え」は 6 回（最後の 1 回は「英霊迎え」と表記されており、「遺骨」が「英霊」になっていく流れがわかる）、14 年度も同じく「遺骨迎え参列」6 回であったから（共愛学園百年史編集委員会,2009: pp.325-414）、16 年度になって回数が急増したことがわかる。

②刊行の動機と本書の性格

『信仰の真実を求めて』はこうした状況の中で刊行されたが、その序文で周は次のように述べている。

「人生は正しき信仰の巡礼であらねばならぬと考えて、校務の傍折に触れては、説教や講話に感ずる所を語り、雑誌や週報に思う事を述べたものが、最近の数年でもかなり多くある。（引用者略）偶々友人某氏が異常なる好意を以て、時局即応というわけでもあるまいが、此の無価値なるものの中に、或る価値を見出し、数十篇を選び、取り纏めて此の一冊としてくれた。是等はいずれも、同胞後進を思うの至情から物したものであるから、敢而勇を鼓して世に送り出すこととした。幸いに、本書が、現今の時局に対して宗教的精神錬成の一助ともなるならば此の上ないことであると思っている」。

この序文からわかることは、本書は書き下ろしではなく、これまでに発表された周の説教や講話の原稿を「友人某氏」がまとめたものであるということ、そして、「現今の時局に対して宗教的精神錬成の一助」となることを願って刊行することにしたという二点である。

「錬成」は、例えば「国民学校令」に「国民の基礎的錬成を成す」とあるように、戦時下

の日本で、皇国民として心身を鍛えあげるという意味でよく使用された言葉である。なぜ、周はこの言葉を使ったのだろうか。また、「現今の時局に対して」とはどういう意味なのか。「戦争に向き合う」という意味か、それとも「戦時下にあつて」と読むべきなのだろうか。この点に関しては周の真意がわからないのだが、少なくとも周が、何が「正しき信仰」か、何が「信仰の真実」か、いまだわからないと考えていたのは確かである。だからこそ、周は序文を「人生は正しき信仰の巡礼であらねばならぬ」という言葉で始め、本書の表題を「信仰の真実を求めて」にしたのであった。つまり、本書はキリスト者、あるいは少なくともキリスト教に関心を持つ人たちに向けて、何が「正しき信仰」か、何が「信仰の真実」を探求するための参考書として刊行されたのである。『基督教要説』が外部向けとすると、これは内部向けの書だと言えよう。

2 著作の概要

(1) 『基督教要説』について

1で確認したように1941年5月発行の『基督教要説』は、1924年11月発行の『基督教要義』の改訂増補・改題版である。そこで、ここでは『基督教要義』と比較しながら、『基督教要説』の概要を見ていきたい。なお、本稿では『基督教要義』は1924年12月発行の三版を用いる。また、『基督教要説』を「41年版」、『基督教要義』を「24年版」と表記して稿を進めたい。

まず、最初に本書の分量であるが、「41年版」は1ページあたり36字×12行で、本文は全56ページ、「24年版」は1ページあたり35字×12行で、付録の表を入れて全46ページである。従って「41年版」は約2割ほど、分量が増えていることになる。

次に「序文」である。「24年版」には序文がない。「41年版」には1(1)に引用した言葉で始まる2ページにわたる序文がある。この序文で周は、17年前の自著が今日でも価値がある理由について次のように述べている。

「同じ様な目的で著わされた書物は、既に幾冊となく流布して居るけれども、本書も又、幾分特色のある内容に於て、存在の価値在ることを確信して、世に送るものである」。

「同じ様な目的」とは、「基督教の大要を理解せしめる」ということである。つまり、キリスト教入門書はたくさんあるが、その特色ゆえには本書には価値があるというのである。その特色とは、前稿で指摘したように、近代的な学問研究の成果を踏まえ、合理的にキリスト教の有用性を論証している点であろう(拙稿,2017; p.98-99)。

次に内容を見てみよう。前稿で筆者は「24年版」の内容を以下のように紹介した(拙稿,2017; p.94)。

「周はまず宗教全般について書き起こすところからはじめ、その後キリスト教の歴史、教派、儀式や祈祷などの実践、イエスや神についての教義、社会倫理という順でキリスト教について解説し、最後に再び宗教全般に戻って、宗教とは何かを問いながら、キリスト教の有用性を主張するという展開になっている。最後に付せられた「世界六大宗教教理比

較表」は、「基督教、仏教、儒教、回々教、印度教、波斯教」の6つの宗教の教理を「神観、世界観、罪惡の主なる原因、救済法、理想的人間、来世観、教祖の人格」の7点から比べるというものである。」

「41年版」はこの内容を踏襲している。ただ、表1の目次の比較からわかるように、「41年版」では「教派」の説明の後に「5 日本基督教史概観」が新しく追加され、「6 儀式・礼典」の項に日本の讃美歌についての説明が加えられ、「8 聖書」の項に日本語訳聖書の解説が付加されている。その一方で、「24年版」の「付録 世界六大宗教教理比較表」は削除された。つまり、周は仏教やイスラム教など、他の宗教との比較の中でキリスト教の有用性を主張することより、日本のキリスト教の歴史や現状を説明して、キリスト教が如何に日本社会に根付いてきたか、あるいは貢献してきたかを主張することが重要と考えたのである。これは、本書刊行の背景と動機を考えると当然のことと言えるだろう。なお、目次からはわからないが、「4 教会、教派」の項でも、各教派の日本語名称や日本での歴史と現状が簡単に説明されている。これは「24年版」にはなかったことである。また、次項で説明するが、全体にわたって追加説明や言葉の言い換えが行われている。「41年版」が「24年版」に比べ分量が2割増えたのはこのためである。

表1 24年版と41年版の目次の比較（波線部分が大きな改訂箇所）

1924 年版目次

- 第1章 宗教に就て
- 第2章 基督教
- 第3章 基督教歴史大要
- 第4章 教会、教派
- 第5章 儀式、礼典
- 第6章 祈祷
- 第7章 聖書
- 第8章 イエス・キリスト
- 第9章 神
- 第10章 基督教徒の生活と社会的理想
- 第11章 活ける進歩的宗教の条件
- 付録 世界六大宗教教理比較表

1941 年版目次

- 1 宗教の必要
- 2 基督教
- 3 基督教歴史大要
- 4 教会、教派
- 5 日本基督教史概観
- 6 儀式、礼典 附 讃美歌
- 7 祈祷
- 8 聖書 附 日本訳聖書に就て
- 9 イエス・キリスト
- 10 神
- 11 基督教徒の生活と社会的理想
- 12 活ける進歩的宗教の条件

(2)『信仰の真実を求めて』について

『信仰の真実を求めて』には編者による「例言」がある。それによると、本書に収録された周の説教や講話は「共愛教会の週報『一粒の麦』に掲載せられた小説教 47 篇と、『新生命』に寄せられた 5 篇」である。

周の説教が掲載された週報「一粒の麦」とは、1930 年（昭和 5 年）に共愛女学校内に設

立された共愛独立教会（認可は1931年）⁴が毎週発行していた四六版4頁立ての印刷物のことで、1～2ページに説教要約、3ページに会員エッセイ（このページは時期によって多少の変化がある）、4ページ上段に礼拝プログラム、2段と3段には各種報告が掲載されている。ちなみに教会の会員は共愛女学校の教職員と生徒、卒業生などで、本書刊行の報告が載っている4月26日の週報を見ると、前週の礼拝出席数は100人となっている。4月12日の週報に本年の全校生徒数は455名と報告されているので、2割ぐらいの生徒が出席していたのではないだろうか。

また、「新生命」とは、1898年（明治31年）に柏木義円によって創刊された「上毛教界月報」（1936年終刊）を引き継いで、1937年1月から1941年4月まで全56号発行された雑誌のことで（通巻460号～517号）、周を含む上毛の5人の牧師が委員となり、地域の教会や共愛女学校の情報、説教や論説など、さまざまな記事を掲載した（共愛学園百年史編集委員会、2007;pp.270－273）。「新生命」に掲載された周の文章は、全てが説教として準備されたものではないため、編者は「講話」と呼んでいるが、内容的には読者に向けて語られたキリスト教のメッセージと言えるので、本稿では全て「説教」として扱うことにする。

『信仰の真実を求めて』には、上記二つの資料に掲載された周の説教52編が3つに分類され、「1 求道篇」と「2 信仰篇」にはそれぞれ18の、「3 奉仕篇」には16の説教が収録されている。

表2は、説教題と掲載資料名と号数、発行年月日を分類したものである。年毎に分けると、1936年の説教が1編、37年の説教が2編、38年9編、39年9編、40年15編、41年9編、42年2編となる。まさに戦時下の説教集といえるだろう。

題からは、「歴史に在し給う神」に始まって「教会生活の实际的方面」まで、過去から現在、さまざまなテーマが取り上げられていることがわかる。その中には「健康と宗教」のような日常的な関心を取り上げたものもあれば、「新秩序への協力」のように「時局」を反映させたテーマもある。

それぞれの「篇」の趣旨については特に説明はないが、「1 求道篇」は「イエスについて」「教会は何を教えるか」などの題から類推できるように教会に通い始めて間もない聞き手を、「2 信仰篇」は「信仰と実生活」「信仰の保持」などの題からすでに信仰を持っている聞き手を想定しているのだろう。また「3 奉仕篇」には「伝道」「礼拝」「教会」等、実地的なテーマが並んでいる。「求道」「信仰」だけで終わらず、「奉仕」が最後におかれている点、実践を重んじた周らしい説教集といえるだろう。

表2 『信仰の真実を求めて』の説教タイトル、掲載誌、号数、発行年月日

*掲載誌の「麦」は「一粒の麦」のこと、「新生命」の号数は通巻号数、年月日は西暦の下二桁/月/日

1. 求道篇

歴史に在し給う神	新生命	500号	39/11/20	健康と宗教	麦	No. 389	38/5/29
基督教解釈	新生命	508号	40/7/20	信仰の標識	麦	No. 468	40/4/28

基督教は必要か	麦	No. 485	40/10/6	神在さば	麦	No. 473	40/6/2
イエスについて	麦	No. 383	38/4/17	心を騒がすな	麦	No. 459	40/2/11
人間の真相	麦	No. 426	39/4/30	教会は何を教えるか	麦	No. 527	41/10/5
宗教に対する期待	麦	No. 393	38/9/11	恐るべきもの	麦	No. 497	41/1/11
神を失えば	麦	No. 418	39/2/19	イエスの宗教経験	麦	No. 404	38/10/23
真の宗教	麦	No. 424	39/4/16	主の愛	麦	No. 477	40/6/30
新しき物と古き物	麦	No. 436	39/7/9	宗教の敵	麦	No. 411	38/12/11

2 信仰篇

信仰と実生活	麦	No. 475	40/6/16	信仰の保持	麦	No. 470	40/5/12
力の根源	麦	No. 410	38/12/4	剛き人	麦	No. 330	37/1/17
神と神々	麦	No. 421	39/3/12	神の仕方	麦	No. 488	40/10/27
知識と信仰	麦	No. 414	39/1/22	苦難の中より	麦	No. 495	40/12/15
敬虔	麦	No. 454	39/12/17	希望を失わず	麦	No. 458	40/2/4
信仰と経済	麦	No. 431	39/6/4	願いと感謝	麦	No. 469	40/5/5/
時勢と時弊*	麦	No. 356	37/9/12	時代に輝く	麦	No. 376	38/2/13
趣味の基督者	新生命	489 号	38/12/20	人格尊重	麦	No. 515	41/6/1
信仰と処世	麦	No. 452	39/12/3	論議と関心	麦	No. 523	41/9/7

3 奉仕篇

人を漁るもの	麦	No. 525	41/9/21	日本的基督教	麦	No. 393	38/6/26
伝道	麦	No. 392	38/6/19	信仰と教育	麦	No. 516	41/6/8
新秩序への協力	麦	No. 481	40/9/1	善意の福音	麦	No. 540	42/1/18
信仰と献身	麦	No. 323	36/11/15	新時代の福音	麦	No. 541	42/1/25
信仰の負債	麦	No. 456	40/1/21	教会観	麦	No. 478	40/7/7
宗教生活の完成	麦	No. 486	40/10/13	礼拝の態度	麦	No. 512	41/5/11
此の職	麦	No. 522	41/7/20	礼拝の意義	新生命	506 号	40/5/20
信仰の拡張	麦	No. 519	41/6/29	教会生活の実際の方面	新生命	494 号	39/5/20

3 変化したこと、しなかったこと

(1) 検討したいこと

筆者は、前稿「周再賜の信仰と神学 (1) 初期の著作の検討から」において、周の共愛女学校赴任前の学術論文 2 編、翻訳論文 1 編、そして、24 年版『基督教要義』を検討し、周の信仰と神学には、以下の 7 つの特徴があると述べた (拙稿, 2017; p. 94)。

(1) 社会問題への関心

- (2) 「人間はみな神の子」
- (3) 倫理的生き方を求める神
- (4) 「神の国」実現への期待
- (5) 模範としてのイエス・キリスト
- (6) 聖書ならびに教会権威の相対化
- (7) キリスト教の有用性に関する論証的姿勢

では、共愛女学校に赴任して 16 年目と 17 年目に刊行された『基督教要説』と『信仰の真実を求めて』では、これらの特徴がどのように引き継がれているのだろうか。変化した点は何か、「時局」はどのように影響しているのか。以下で検討してみよう。

(2) 『基督教要説』の場合

2 で見たように、「41 年版」は「24 年版」の部分的改訂であるから、基本的に上記 7 つの特長は引き継がれている。ただ、「41 年版」では、6 番目の「聖書ならびに教会権威の相対化」がより具体的に主張されており、また、7 番目の「キリスト教の有用性に関する論証的姿勢」に関しては「誰に対して有用なのか」という点に変化が生じている。これらについて説明しよう。

①聖書ならびに教会権威の相対化について

まず、「聖書ならびに教会権威の相対化」についてであるが、「41 年版」では「4 祈祷」の項に、祈祷による治癒を主張して近代医学を拒否するキリスト者への批判が、また、「9 イエス・キリスト」の項に、処女降誕を主張してイエスの母マリアを神のように崇めるキリスト者への批判が付け加えられている。おそらく周の身近に、聖書の「一字一句」をそのまま事実と受けとめ、祈祷による治癒を絶対化し、処女降誕説を排他的に主張する保守的キリスト者がいたのだろう。聖書は近代的学問研究の成果の下で読まれるべきと考えていた周は、そうした信仰を容認することができなかった。そこで、「8 聖書」の項の最後に、「聖書研究はなるべく最寄りの牧師の指導を受けるのが便利である」と付け加え、聖書を正しく相対化して読むようにアドバイスしたのである。もちろん、「最寄りの牧師」とは学問的訓練を受けた周の仲間の牧師たちを意味している。権威の相対化を主張する周が、牧師の指導を受けよと勧めるのは矛盾しているが、それだけ保守的キリスト教の広がり危機感をもっていたのではないだろうか。

②キリスト教の有用性に関する論証的姿勢について

「キリスト教の有用性に関する論証的姿勢」に関しては、「24 年版」と「41 年版」の結びの言葉を比べてみると、その違いがよくわかる。「24 年版」ではキリスト教が「社会人類に対して有用である」ことを論証しようとしているのに対し、「41 年版」では「国家に対して有用である」ことを論証しようとしているのである。「国家」とはもちろん、「日本国家」のことである。以下に、「21 年版」と「41 年版」の結びの言葉をならべてみる。特に波線の部分に注目したい。

(24 年版) 此れ等の理由によりて吾人は、基督教が生ける進歩的宗教の条件を具備したもので

あると信じ且つその伝播は社会人類の為に幸福であると確信するものである。(p. 41)

(41 年版) 以上の如き理由に依って、著者は、基督教が生ける進歩的宗教の条件を具備したものであると信じ、且つその伝播は、社会、人類のために幸福を齎らし、国家にとって有用であると確信する者である。(p. 56)

「24 年版」も「41 年版」も、それぞれの結論に向かって論が進められるので、前者では世界六大宗教との比較で基督教の優越性を論証するという展開になり、後者では日本における基督教の歴史や現状を説明するという展開になる。特に、「41 年版」に付け加えられた「5 日本基督教史概観」では、よほど基督教の貢献を強調したかったのだろう。1549 年のザビエル鹿児島上陸から近年のプロテスタント教会の事情までを略述したわずか 5 頁ほどのまとめの中で、基督教が「わが国民思想の先導をつとめた」こと、「国賊のように言われながらも、キリストの犠牲的精神を以て、国家国民のために、絶えず『糧食を水の上に投げ』る様な奉仕を続けて居る」こと、「歩調を揃えて国民精神の指導に尽している」ことが繰り返し強調されている。これは、まさに戦時下における基督教排撃の風潮に対する周の反応であろう。

③文言の削除へ変更について

その他の項でも、反戦反国体の意図ありと取られかねない文言は削除するか、別の言葉で言い換える工夫がなされている。それらを以下に挙げてみよう。波線を付した部分が文言の削除や変更が行われている箇所である。

① (キリスト者の生き方について論じているくだりで)

(24 年版) 国家間の争い、階級の不平等、人間の偏見、男女の不同権などの弊を一掃することは宗教生活のプログラムの大切な一部である。(pp. 36-37)

(41 年版) さまざまな争議や、不平、さては人種の偏見、男女不均衡等の弊を一掃することは、宗教生活のプログラムの大切な一部とせねばならぬ。(p. 51)

② (基督教は何を大切にしているかを論じているくだりで)

(24 年版) 基督教を社会主義と同一視したり、又国家の便利な道具と見なしたり、時には禁酒禁煙が基督教の全体かの如く考えたりするは著しい間違いで、基督教は国際連盟でもなければ軍国主義でもない、又大亜細亜主義でもなければモンロー主義でもない。(p. 37)

(41 年版) 基督教を以て社会主義と同一視したり、時に禁酒禁煙が基督教の全体の如く考えたりするのは著しい偏見であって、基督教は決して国際的な、あるいは政治的な、あるいは思想的な、或る主義ではないのである。(p. 51)

③ (「活ける進歩的宗教の条件」を列举したくだりで)

(24 年版) 死せる人間の崇拜、地方的 (又は国民的) 神の礼拝でないこと。(p. 38)

(41 年版) 死せる人間、地方的神の礼拝でないこと。(p. 53)

これらからわかることは、「41 年版」では「国家」「国民」を批判的な文脈の中で使うことを避け、また、「階級」「不平等」「同権」等、社会主義を思わせる言葉を使うことを避け、「国際連盟」「軍国主義」「大亜細亜主義」「モンロー主義」等の具体的な表現を抽象的な表現に置き換えているということである。戦時下の状況に鑑みて、非常に注意深い字句の訂正がなされたと言えよう。

④小括

以上のように、『基督教要説』から見える周は、若い頃の 7 つの神学的特徴を引き継ぎながら、聖書や教会権威から自由になろうとしているがゆえに、聖書無謬説に立つ保守派を受容できない周であり、また、時局に敏感に反応し、キリスト教の日本国家に対する有用性を主張してやまない周である。

ここでひとつ留意しておきたいことは、周が序文で、『日本基督教史概観』は、友人某氏の筆に成ったもの、さらに「本書全体に亘っての加筆修正に就ても、同氏に負うところがある」と述べていることだ。校務多忙の故に「友人某氏」に頼らざるを得なかったのか、それともほんとうは刊行に積極的でなかったのか、果たして改訂のどこまでが周の本意なのか、いろいろな可能性があるが、現在のところ、こうしたことについて何かを判断出来る材料はない。ここでは本書の改訂には「友人某氏」の協力があったということだけ付記しておこう。

(3) 『信仰の真実を求めて』の場合

さて、『信仰の真実を求めて』は 1936 年 11 月から 1942 年 1 月までの説教 52 編を集めたものである。説教ごとにテーマはあっても、全体として何か一つのテーマを論じているわけではないから、初期の論文や『基督教要義』と単純に比べることはできない。しかしながら、ここでも全体として初期の 7 つの特徴は受け継がれているといえる。ただし、17 年間の校長としての経験を反映して、変化している部分もある。さらに、「時局」の影響がはっきりと見られる説教もある。以下に詳しく見ていこう。

①社会的関心ならびに「人間はみな神の子」について

初期の著作の周の特徴の一つは、「人間はみな神の子」というイエスの教えへの共感と、キリスト者の社会的責任の強調であった。特に、周は初期の論文で労働運動に共感を示し、資本家による富の独占と労働者搾取の問題に関わろうとしない当時の教会の状況を批判して、キリスト者が本気でイエスに従おうとするなら、「少数の強者が弱者をいじめ、または富者が貧者の生活を圧迫」としている現状を変革していこうとするのは当然であると主張している(拙稿, 2017: p.95)。

『信仰の真実を求めて』でも周の社会的不平等への怒りや、キリスト者の社会的責任の主張は何度か登場する。例えば「教会は何を教えるか」という説教の中で周は言う。「教会

は社会正義を教えなくてはならぬ。(略) 社会正義とは一言で言えば、強者が弱者を助け、その重荷を負うことである。親は子のため、夫は妻のため、健康者は病者のため、力有る者は力無き者のために尽すことである。更に進んでは、社会上不必要なる区別偏見を取り除くことである。一掃進んでは、人種の偏見をも無くすることである」(p.60)。ここには初期の論文のように労働運動への言及はない。代わりに親子や夫婦など、身近な関係性における不平等の問題が言及されている。女学校には朝鮮や台湾からの留学生もいたので、民族的偏見の問題も身近であっただろう。周は若い頃と同じく、社会的な不平等の問題に関心を持っているが、働きの場に合わせて着目点が変化したと言えよう。

また、周は「貧者」だけでなく「富者」が抱える問題にも目を向けている。「信仰と経済」という説教の中で周は言う。「富の偏在は、社会に重大な結果を来すもので、それは幸福よりも不幸を齎すのである。それによって、貧者も富者も非常な害を被る。その中で病気と罪惡は最大の害惡であろう」(p.95)。周は、貧者だけでなく富者も、富むことによって「魂を失」い、病気と罪惡を重ねることになるというのである。

また、社会的な不平等の問題にキリスト者はどう向き合っていくかに関して、かつて周は、キリスト教は「労働者の琴線に触れる宗教」にならねばならないと主張したが(拙稿,2007; p.95)、「信仰と経済」では次のように述べている。「全て所有権は人間にあると考えたところに、今日の世界の不幸がある」、「全ての宝は神からあずかったものである。富の本当の持ち主は神である」(p.96)。したがって、自分が所有するものについては、「如何に少額であろうとも、如何に多額であろうとも」全て神から預かったものと考えて、有益かつ有効に用いる義務があるのである。もちろん、「有益かつ有効」とは、自分のためではなく他者のため、貧しい人々のため、ということが含意されている。

このように初期の主張は、女学校という場を得て、そこに集う人達の現実が届くように新たに展開されていることがわかる。

②神理解、歴史理解、イエス理解について

もう一つの周の初期の特徴は、キリスト教の神は倫理的意思をもった人格的神であり、一人ひとりの人間が尊重される「神の国」実現に向かって歴史を導いておられるという確信であった(拙稿,2017; p.96)。人間は神と共に働いて、この世に「神の国」を実現させることができる。だから周は未来に希望を持っていた。この周の主張も同じく、『信仰の真実を求めて』にしっかり引き継がれている。冒頭の説教「歴史に在し給う神」で、周は力強く宣言する。「我等は信ずる、歴史は神人の合作である、と」(p.13)。また言う。「我等は確信する、歴史は神の手中にある、決して悪人や不義の人々の権下にあるのではないと」(p.14)。

しかしながら周は、今は忍耐しなければならない時代だと考えていたようだ。同じ「歴史に在したもう神」で周は、「人間社会は、漸次進歩改良されつつあるであろうか、またはその反対に、次第に悪くなっていくのではないであろうか」と問いかけ、「適者生存、力即正義といった様な思想が、次第に勢を得て来ているのではないか、疑わざるを得ない」と述べる(p.10)。また、「心を騒がすな」では「心を騒がすなとは無理な注文である」と言い、

「正義の神がどうして不義の横行を許すのであるか」「平和の神が支配し給うにどうして世界中に不和や闘争が耐えないのであるか」と問いかける (p.54)。「信仰と处世」では「真理の光に照らされて見たならば、此の世は常に暗黒で、不振と不義に満ち、神にそむく世界である」という (p.104)。もちろん「第二次大戦を産み出した」今もそうである。

こうした危機感からだろう。本書には、苦しみの意味や、困難の中でどう生きるのかをテーマにした説教が多い。「苦難の中より」「希望を失わず」など、題からも類推できるだろう。冒頭の「歴史に在したもう神」でも「歴史は神の手中にある」と述べた文章の次に続くのは「この確信があればこそ、『死の陰の谷を歩むとも禍を恐れじ』とうたうことができる」である (p.14)。

そればかりではない。周は、イエスの生涯における苦難の意味にも注目する。すなわち、貧困と誘惑、ゲッセマネの祈りと十字架等イエスが経験した苦難に注目し、イエスの一生から学ぶ第一のことは「神が人間と共に苦しみ給うことである」とであると述べる (p.119)。初期の著作では、むしろイエスは人間の理想、模範として提示されていたので、イエスが味わった苦しみへの着目は新しい展開と言えるだろう。周はイエスの中に「共に苦しむ神」を見出して、自分も慰められているようだ。

③聖書ならびに教会権威の相対化について

周は24年版『基督教要義』で伝統的な教会の教えについて次のように述べて、聖書も教義も研究と議論の対象となるべきことを主張した。

「従来の基督教徒の中には『処女降誕』『奇跡』『復活』『三位一体』『再臨』『世末審判』等の如き、寧ろ人生と縁の遠い論説に没頭し、これらを信じぜずば基督教徒ではないと主張したりして、遂に基督と人間との間に種々のむずかしい信仰箇条や教理を設けて説の異なる人を排斥した様である。斯かるは実に基督の大精神を侮辱し彼の示された明々白々の真理を弄ぶ様なものである。」 (pp.27-28)。

この文章は41年版『基督教要説』にもほぼそのまま引き継がれ、さらに3 (2) ①で見たように、「9 イエス・キリスト」の項では「処女降誕説」をそのまま信じることへの批判も付け加えられていた。しかし、「24年版」でも「41年版」でも、こうした伝統的教えに対して周自身がどう考えるかについては明らかにされていない。それが明示されているのは、『信仰の真実を求めて』に収録された「人格尊重」という説教である。この説教で周は「処女降誕説」について次のように述べている。

「性によって人間を区別した結果、最も不合理なことが最も重要なこととして考えられている一例は、イエスの処女降誕説である。わが子を産むことは正常なことであるにも関わらず、夫婦によって生まれた子を不浄と見なしたためであるか、イエスをもって処女マリヤから生まれたという大胆極まる伝説を作り上げた。それならば、いつそのこと桃太郎が桃から産まれたように、イエスを桃から産まれたとしなかったことは、非常な失策ではないか」。(p.134)

ここで周は、処女降誕説は性差別の産物だと喝破する。当時としては非常に大胆な発言

である。さらに、この説教に続く「論議と関心」で周は、社会の進歩に議論は必須で、宗教の世界においてはましてや。宗教は真理を追究しているのだから、「縦論横議、侃々諤々」議論を盛んにしていこうと呼びかけるのだ (p.139)。「人格尊重」と題する説教は特に教義についての議論を呼びかけたものではないが、聖書や教会権威に捕らわれなくて、議論によってキリスト教を発展させていこうとする周の立場がよく現れていると言えよう。

④「時局」の影響について

最後に「時局」の影響についてみておこう。本書に収録された説教は 1 編を除いて日中戦争から太平洋戦争の始まりの時期に語られたものである。したがって、周は、戦争および戦争を遂行する国家、また、戦争下の国民生活等について説教の中で触れている。しかし、何をどう語るかは説教によってかなり違う。そこで、該当箇所を抜き出してみることにする。波線は特に注目したい部分には波線を引いておく。

1 求道篇

ア.「基督教解釈」

されば基督教は、総べて人間社会の正しい生活を是認し、家庭に在りては最も忠実なる一員となり、国民としては最も忠義なる国民となり、其の真面目なことは他の何れの宗教信者にも劣らない。こうした者を排斥しようとするは、全く誤解に基づく偏見からである。(略) 基督教の伝道は、単なる宗旨の伝播ではなく、もっと深い意義がある。それは、至高の愛国運動である。即ち日本人を遍く新生に導くことに依って、新秩序の建設が可能であり且つ促進され、神の国の実現が達成されるという信念を以て動いているのである。(p. 18)

イ.「基督教は必要か」

今日政府では、政治的見地から隣人相扶けることを推奨しているが、それは宗教の方面から基督教の目指しているところに合致している。我らは、一家、一村、一県、一国という具合に、まず近い所から隣人愛を実践していくべきである。こうして遂には人類愛にまで拡張される。所謂八紘一宇の精神である。(p. 20)

ウ.「真の宗教」

斯く、人間を改造し、道徳生活を実行し、希望洋々たる態度を与える宗教こそは真の宗教である。基督教は、此等の諸条件と符号する。真の宗教を信じる国民は幸福である。その国家は隆盛になる。故に国を愛する者は、真の宗教の認められん事を希望し、多くの同胞の之によりて救われんことを望むは当然で、伝道の心なき者は信仰の希薄なるものである。(p. 39)

2 信仰篇

エ.「智識と信仰」

恐れないで知識を求めよ。ソロモン王に負けぬ程知識を求めよ。又、信仰を求めよ。アブラハム程の信仰をもて。信仰のみで生き様とし、知識だけで満足し様とするは不可である。着弾距離を測ったり舵を回したりするのは知識であるが、「皇国の興廃此の一戦にあり」と叫ぶは信仰である。知識と信仰と二者合作

して、日本海海戦の大勝利は得られたのである。天国には男女老若智愚職業の別なく、福音は万人に伝わるべきもので、愛と理性を以って打ち建つべきである。(p. 89)

オ. 「神の仕方」

(神はどんな時にでも導いてくれるという趣旨の説教の中で)

戦争は非常手段であるが、その中において人は信仰を回復し、献金することを喜び、忍耐、同情、克己等の美德を経験し、進んで人間の弱き事を悟り、天地神明に頼ることを悟る。戦後の復興に至っては、莫大の建設的努力を必要とする。如何なる混乱の時にありても、結局人間は神に近づくことを学び、社会は進歩するものである。(p. 116)

カ. 「苦難の中より」

今は、国民一同が、大なる目標の下に、節制克己すべき時である。此の大目標を忘れてはならぬが、これを遂行するに、宗教的覚醒は甚だ必要である。即ち、神は我等と共に在る、此の確信の下に我等は進むべきである。(p. 121)

キ. 「希望を失わず」

人間は、勉強し、努力し、稼ぎ、建設し、事業を起こし、名声を博し、財産を堆積して揚々として得意がるのであるが、一旦事有りて自己の弱気を悟るや、失望し悲観する。蓋し勝利の英雄たるは易いが、敗北の英雄たることは極めて難い。日露戦争に於ける乃木将軍や、上村司令官の如きは、実に屈忍対の英雄であった。(p. 122-123)

3 奉仕篇

ク. 「新秩序への協力」

新秩序の建設は、政治家、実業家、官吏、または然うした職責にある人々だけの問題でなくして、全国民が参加しなければ成し遂げることができない問題である。そこで地位も、金銭も、権力も何もない我等が、此の新秩序建設の大事業に居ながらにして参加し得る至極観敏なる方法が、幸いに手近にあることは実に有り難いことで、試みに其のいくつかを挙げてみよう。

1 迷信打破 (以下略)

2 贅沢をやめること (以下略)

3 虚栄を慎むこと (以下略)

4 勤労尊重 (以下略)

5 敬神愛人 (略) 我等は祖先以来敬神愛人の理想を目標としてきたが、今日に至って漸く国家社会が全体として此の理想に向かって動くようになってきた。我等は一層努力して敬神愛人を実行せねばならぬ。利己主義、自己中心の行動は、断じて愛国的行為ではない。

我等はまず以上しるした様な手近な方法で、新秩序建設に向かって協力しようではないか。(p. 150-154)

ケ. 「宗教生活の完成」

今日の如き情勢の下にあって、我等の均しく学び且つ感ずるところは、国家生活が如何に大切であり、人生に強い影響を及ぼすかということである。国民の一致協力は、今日何人も認識できることである。しかし、物質的方面の国家生活は、結局功利主義に終わり、本当の理想的生活ではない。政治即ちまつりごととは、その言葉の示すとおり、宗教生活を加味して初めて完成されるのである。政治は宗教を必要とする。

今日は、此の事も大に唱えられ、且つ実行せられ、又実行せられんとしつつある。(pp. 162-163)

コ. 「日本的基督教」

(基督教は愛と平和を説いてきたのに、平和を実現するどころか、戦争に加担してきたという説明の後)

そこで私は、日本的基督教を提唱する。長年の間鍛えられてきた武士道の精神で、キリストの精神をとらえることを言うのである。洗礼を受けた武士こそ、真正の基督者である。我等は、キリストの精神の日本人で無ければ解し難い部分をよく努力理解して、之を世界に発表し紹介せねばならぬ。かの黒人を奴隷として使役する人種、支那人や印度人を軽蔑し虐待する国民、植民地の多きを競う国民、有色人種を劣等視する民族、其の入国さえも禁ずる国家等は、如何に自ら基督教とてあるといいまたは基督教国であると称しても、羊の仮面を被った狼に過ぎぬ。今や「時は満てり」である。我等は勇敢に立ち上がって、自ら独特の聖書解釈を試み、新たなる真理を解明すべきである。(略)

(以下、結論として) 真理は、古今東西に貫くべきものであるから、今更日本的基督教などという事を言わねばならぬのは悲しむべきことであるが、欧米人の大体は頑迷不遜の人種で、基督教も大に頑迷不遜に着色せられ、判りもせぬ事を口に唱えて得意がる日本人の信者が漸次多くなって来たから、我等はまづ、欧米人やギリシャ人などが勝手に追加したキリストの精神に反する部分を除き、敬神愛人に還元せねばならぬ。我等は、先入主となっている頑張りを止めて、虚心平気になって、日本人の立場からよく研究して、神の国の福音に貢献するところが無くてはならぬ。(pp. 172-175)

サ. 「信仰と教育」

第二に、基督教主義教育については、国家の教育が国民を作ると同様に、神の子として、宇宙人としての教養をせねばならぬ。国家の担当する方面は物質的、形態的の方面であるが、教会は精神的方面を担当するので、両者の間には何等の矛盾もあるべきものではない。我等は、一方に於て忠良なる国民であるが、精神的には天国の善良なる市民たらんとして練磨する者である。(p. 178)

シ. 「新時代の福音」

正義の神、愛の神は、何時迄も斯る状態を傍観し給うはずはないので、一応人類の所謂文化を清算せねばならなかった。之が第一次世界大戦の意義であった。然るに、キリストに由て示された人類共栄の大理想は打ち捨てられて真面目に取り上げられず、依然として熱帯地方を支配するは白人の特権なるかの如く、有色人種を劣等視するが神の理法なるかの如き振る舞いをしたのは、イエスの教えに最も遠き思想といえる。

人類の歴史は、既に大回転を為し始めた。イエスの福音を信ずると言いながら、之を政治に実現しなかった国家は、神の信託をつなぐことはできぬ。基督教国と称しながら、其の遺口が全く異教的非人道的であった国々に対して、神の清算期が切迫している。(略)

第三の点は、贖罪の福音である。罪なき者が罪ある者のために苦しむことが贖罪の意味であるとせば、今日は実に之が急務である。日本国民は、東洋諸民族の解放のために苦しんでいるのである。(略)

(まとめの言葉として) 人類の歴史に於て、非利己主義、隣人愛、贖罪の福音を不必要とする時代は未だ無いが、今日こそは此等の福音を最も要求する時である。斯る内容の福音を有する基督教は、単なる外形に囚われることなく、此の難局に際して、専心一意、伝道報国の誠を致すべきであると思う。(pp. 183-185)

ス. 「教会観」

教会は、国家と並んで、人類社会に最も大切な役割を演ずる組織である。国家は、主として政治、経済、安寧、秩序を保ち、国民に物質的方面の供給指導をなし、之が保障をするのであるが、教会は、主として

人間の精神生活即ち宗教生活の指導をする。(略)

教会こそ真に愛国心を産み出し、愛郷心を養い、孝心を全うする所だということが判る時が来る。教会に熱心な人は、その国家にも民族にも熱心なことは、パウロの例を見てもわかる。日本に於ける基督教会の先輩達は、大抵日本の国家を思う愛国心に駆られて、キリストの宗教に熱心になった人々であった。(pp. 185-187)

以上を分析すると、「1 求道篇」の3つ(ア～ウ)は、キリスト教が如何に「新秩序の建設」や「八紘一字」と矛盾しないか、如何に愛国的かを訴えるもので、『基督教要説』と同じく、弁明を目的とした文章である。「2 信仰篇」の4つ(エ～キ)は、抜粋ではわかりにくいだが、説教の趣旨に必ずしも必要な文章ではなく、いわば便宜的装飾的に使われた文章である。「3 奉仕篇」のケ、サ、スは、国家と宗教(教会)は補完的であることを主張して、戦争下にあるキリスト教の存在理由を論証しようとしたもので、ア～ウと同じ性質のものと言えよう。

以上の説教と性質が異なるのが、「3 奉仕篇」のク。「新秩序への協力」、コ。「日本的基督教」、シ。「新時代の福音」である。これらは説教そのものが国策に則って、聞き手の心を戦争に向けようとするもので、「戦争」という言葉を注息深く避けているものの、内容は翼賛説教である。特にコはアメリカとイギリスを「羊の仮面を被った狼」と非難しながら日本の独自性を主張し、シは、かつては「非常手段」(オ。「神の仕方」)と理解していた戦争を「東洋諸民族の解放」のための正義の戦争と捉えている。ちなみに、これらの説教の初出は、「新秩序への協力」が1940年9月1日、「日本的基督教」が1938年6月26日、「新時代の福音」が1942年1月25日である。

ク、コ、シ以外は、戦時下のキリスト教排撃を避けるための工夫と受け取ることが可能だが、ク、コ、シはむしろ積極的な「皇国の国是」支持である。これらは、当時の生徒達が証言する戦時中の周の姿勢からは考えられない説教であろう。

ここで、生徒たちの目に映った戦時中の周の姿を見てみよう。共愛学園同窓会が1994年に発行した卒業生たちの回想録『思い出の記 愛の園で』には、戦時下に生徒だった複数の卒業生たちが、「修身」の授業は周の担当だったがその内容は聖書の学びだったこと、勝っても負けても英語は必要だからと週5時間の英語の授業が最後まで続けられたことなどを証言し(金玉羅、呂聖淑、住谷サチ子)、朝鮮からの留学生達は周が彼女達に見せた特別な思いやりについて述懐している(金玉羅、呂聖淑)⁵。中でも注目すべきは、熱烈な軍国少女だったという飯塚実枝子の6ページに亘る詳細な証言である。飯塚は事あるごとに周に反抗したゆえに、起こった出来事をよく記憶しており、例えば、12月8日すなわち対米戦争開始の日の朝、周が読んだ聖書の言葉は「剣を持って向かう者は、剣によって滅ぶべし」であったこと、続いて「不幸にして戦争は始まったが、一日も早く平和な日が訪れることを祈る」と語ったこと、腹を立てて抗議した飯塚に対し、周は「戦いは自分の命を捨てるだけでなく、相手の命も奪うものだ。愛とは報いを欲せず自分の命だけを捨てるもの

で、他の命を奪うのは決して愛ではない」と言い聞かせたことなどを書き綴っている (pp.52-53)。つまり、飯塚を始めとする生徒達の証言から見える周は、「平和と命の尊さを訴えた勇者」(共愛学園同窓会,1994; p.56)であった。こうした生徒たちの証言と周の翼賛説教は明らかに矛盾する。この矛盾をどう考えればよいのだろうか。

現時点の資料では、周は女学校や教会を守るために、心ならずも翼賛説教をしたというふうに考えるのが一番自然であるようだ。この頃の共愛女学校は、1 (1) ④で確認したように、キリスト教学校であるがゆえに国体に反する教育を行っていると攻撃されたり、懐疑の目で見られたりしていた。さらに、前述の飯塚は、敗戦間近のある日、国防婦人会長をしていた飯塚の母のところに司令官がやってきて、「平和と自由を唱える反戦論者の周校長を逮捕し、共愛からキリスト教を廃止する」と告げる事件があったという証言も残している (共愛学園同窓会,1994; p.55)。アメリカ留学経験のあるキリスト者であり、その上台湾人である周が、当局の監視下にあったのは間違いないだろう。こうした中で、周はキリスト教を弁明するだけでは不足、戦争協力に向けての説教もしなければならぬほど追い詰められていたのかもしれない。

しかし、今、そのように結論付けるのは拙速な気がする。当時の共愛女学校あるいは周がどのように監視の対象になっていたかについては、例えば特別高等警察等、外部の資料による裏づけが必要であるし、また、日本の植民地であった台湾に生まれ、日本人になりきろうとした周の内面についてはまだまだわからないことが多い。

周の半生記を本人へのインタビューを元に、本人のチェックを経て刊行した管井によると (1947; pp.26)、17歳で台湾から単身日本にやって来た周は、当初、「君が代」を歌うのが難しかったという。「歌うつもりでいても、その場に臨むと、声が咽喉に痞えたようになってしまってどうしても歌にならず」、「一年余りも煩悶苦闘した後、ようやく歌えるようになった」そうだ。当時、日本人になるということは、「天皇の臣民」になることであり、その見える形が「君が代」を歌えるようになることだった⁶。歌えない「君が代」を歌えるようになるための煩悶苦闘を経て、周は「天皇の臣民」意識を自らの内面に叩き込んだと言える。そんな周は、生まれながらの日本人よりもっと「天皇の臣民」であったとは考えられないだろうか。とすれば、生まれながらの日本人よりもっと「皇国の国是」を批判することは難しかったのではないだろうか。周にとって、果たして「日本人である」とはどういうことだったのか。

また、周が熱心に主張した「キリスト教は日本国家にとって危険ではない、むしろ有用である」という主張は、容易に「皇国の国是」翼賛に繋がっていく。果たしてどこまでが周の本意で、どこからがやむなかくかを判断するのは簡単なことではない。そしてもし、やむなくであれば、周をそこまで追い詰めた社会の状況をもっと検証していく必要があるだろう。

さらに、本書の刊行にも「友人某氏」が関わっていることを忘れてはならない。序文によれば、数ある説教からこれら 52 編を選んだのは周自身ではなく「友人某氏」であった⁷。

もちろん周の同意の下にこの説教集が刊行されたのだが、「友人某氏」の考えがどの程度、本書に反映されているのか。この点も留意しておく必要があるだろう。したがって、周の信仰と神学への「時局」の影響をどう評価するかは、もう少し周の全体像を掴んでからにしたい。ここでは、『信仰の真実を求めて』の中には、基督教の国家に対する有用性に言及している説教 6 篇、便宜上戦争を話題にしている説教 3 篇、聞き手の心を戦争に向けようとする翼賛説教 3 篇があることだけを確認しておこう。

⑤小括

以上のように『信仰の真実を求めて』から見える周は、若い頃の 7 つの特徴を引き継ぎながら、共愛女学校の教職員や生徒、関係者との関わりの中で聖書を読み、福音を語る周であり、17 年間の校長としての苦労を背景に、苦難の意味に関心を広げ、イエスの味わった苦しみに励まされる周であり、戦時下の基督教や基督教学校への排撃の風潮が高まる中で熱心に基督教を弁明し、時には「皇国の国是」への協力を勧める説教もする周であった。

まとめ

本稿の課題は、『基督教要説』ならびに『信仰の真実を求めて』の中で、周が若い頃の信仰や神学をどのように変化させたのか、また、戦時下の社会状況が周の著作にどのような影響を与えたのかを探るというものであった。そのために、本稿ではまず、①これら二つの著書が出版された時期の社会状況全般ならびに基督教や共愛女学校をとりまく状況を概観し、②『基督教要説』は戦時下で高まっていく基督教排撃の風潮に対して、基督教を弁明するために刊行されたこと、③『信仰の真実を求めて』は対英米戦争の火蓋が切って落とされ、緒戦の勝利に湧く日本社会の中で、基督教者が「正しい信仰」あるいは「信仰の真実」を探求していくことができるように、周の説教を集めて刊行されたことを確認した。その中で見えてきたことは、①これらの著作には社会問題への関心や「神の国」実現の希望等、周の若い頃の信仰と神学が深められながら、引き継がれているということ、また、②『基督教要説』には「基督教は国家にとって危険どころか、むしろ有用」であることを弁明するための改訂が行われており、③『信仰の真実を求めて』には「基督教の有用性」への言及ばかりでなく、「皇国の国是」を翼賛する説教も含まれているということである。

この最後の点、周が「皇国の国是」を翼賛する説教を行ったという事実は、周が常に平和と命の大切さを説いたという当時の生徒達の証言と矛盾する。なぜ周はそのような説教を行ったのか。周の本心はどこにあるのか。これは今後、さらに追求されるべき新しい課題であろう。おそらくそのための基本資料の一つは、共愛独立教会の週報「一粒の麦」である。前述のように、『信仰の真実を求めて』に収録された説教の多くは、この週報から抜粋されている。幸いなことに、共愛学園資料室にはこの週報が No.30（1929 年 4 月 28 日発行、この頃の名称は「共愛同信会週報」）から残っている。周の説教と教会の歩みを辿る

ことで、新しく見えてくることがあるに違いない。次回以降、この問いを念頭において、さらに週の信仰と神学を追求していきたい。

¹内閣制度百年史編纂委員会『内閣制度百年史 下』内閣官房 1985年 pp.233-234

²文部省普通学務局編『国民学校令及国民学校令施行規則』内閣印刷局 昭和16年
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1460926/12> (国立国会図書館デジタルコレクション)

³この証言は小暮登志子のものである。もう少し時期は後になるが、これ以外にも田島信子、吉沢中子、住谷サチ子が「キリスト教学校であることを理由に陰口をたたかれた」などの思い出を残している。

⁴共愛独立教会については『共愛学園百年史 下巻』p.94-101に説明がある。

⁵1944年に卒業した朝鮮人留学生、呂聖淑は回想文の最後に周からもらった手紙を書き写して紹介している。終戦間近に書かれたと思われるその手紙の中で周は、「朝鮮の子たちからの手紙は大なる喜びである」と言い、消息のわからなかった朝鮮人生徒の消息がわかったことを「日本海に落とした真珠を見いだしたほどの喜びである」と述べている。

⁶1. (1) ④で引用した知事の答弁内「引用者による略」の部分には、知事が以下のように述べたと記されている。つまり「君が代」を歌わないことは国体精神に反していることであったのだ。「君が代を歌うということは『日本ノ版図ニ於テ日本ノ国土ニ於テツマリ国体精神ヲ有ツテ教育シナケレバナラヌモノガ君ガ代ヲ歌ワタワナイトイウ事ハ、既ニ国体精神ニ反シテ居ル。ソウイウ教育ハ飽迄モ打倒シナケレバナラヌ』」。(共愛学園百年史編集委員会, 2009: pp.455-456)

⁷「一粒の麦 No.551」の書評は、この「友人某氏」は高崎教会牧師で、週の半生記の執筆者でもある管井吉郎と明かしている。とすると、『基督教要説』を手伝ったのも管井吉郎と思われる。

文献

1. 周再賜の著作

『基督教要義』日本組合基督教会本部、1924 年

『基督教要説』警醒社、1941 年

『信仰の真実を求めて』警醒社、1942 年

2. 資料

共愛独立教会週報「一粒の麦」No.330（1937 年 1 月）～No.574（1942 年 11 月）

上毛教界月報社発行「新生命」通巻 460 号（1937 年 1 月）～通巻 517 号（1941 年 4 月）

3. 論文・書籍

文部省普通学務局編『国民学校令及国民学校令施行規則』内閣印刷局 1941 年

管井吉郎『周再賜』群馬教壇社 1947 年

内閣制度百年史編纂委員会『内閣制度百年史 下』内閣官房 1985 年

山住正己『日本教育小史－近・現代－』（岩波新書）岩波書店 1987 年/2005 年

共愛学園同窓会編『思い出の記 愛の園で』共愛学園同窓会 1994 年

吉田裕『アジア・太平洋戦争－シリーズ日本近現代史⑥』岩波書店 2007 年

NCC 教育部歴史編纂委員会編『教会教育の歩み－日曜学校から始まるキリスト教教育史』
教文館、2007 年

共愛学園百年史編纂委員会『共愛学園百年史 下巻』学校法人共愛学園 2009 年

キリスト教史学会編『戦時下のキリスト教 宗教団体法をめぐって』教文館 2015 年

拙稿「周再賜の信仰と神学（1）－初期の著作の検討から－」『共愛学園前橋国際大学
論集 第 17 号』共愛学園前橋国際大学 2017 年

付記 引用文中の旧仮名遣いや旧字体等は、現代仮名遣いや新字体等に改めたところがある。

謝辞 本稿を執筆するにあたり、共愛学園資料室担当の角田進先生（共愛学園高校）に周再賜の著作、「一粒の麦」「新生命」等関連資料を閲覧させていただくなど、大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

Abstract**Saishi Shiu's Religious Faith and Theology (2):
An Analysis of His Wartime Writings**

Kaori Oshima

Saishi Shiu who served as the principal of Kyoai Girls' School from 1925 to 1965 published two works during the Japan-China War and the Pacific War -one in 1941 and the other in 1942. One book entitled "Introduction to Christianity" was a revised edition of "Guide to Christianity" previously published in 1924. The other book "Seeking the Truth of Faith" is a collection of 52 sermons that were delivered at Kyoai Independent Church from 1936 to 1942. One of the features of these writings is the continued liberal theology he showed in his previous work as I discussed in my former research note. Another feature is the effect of both wars. "Introduction to Christianity" has been revised from the position that Christianity is not dangerous to Japanese society but rather useful, because it fosters patriotism, and "Seeking the Truth of Faith" contains three sermons that assert that the Pacific War is a war for justice and peace to release Asia from Western rule and create a new world order. What made Shiu, who was known as an anti-war pacifist, express such views? In the context of the wartime social situation, we must consider his inner conflict as a result of the Japanese colonization of Taiwan. (The English notation of Shiu's name follows that of his paper published in 1923 and 1924 in "Christian Studies" No.1 and No.2. by Doshisha University)